世田谷区立給田小学校
学校運営委員会通信

平成24年度 第7号
平成25年3月21日
世田谷区立給田小学校
学校運営委員会
委員長　井上健

# 繋がる給田・強い給田

## ～今年度も給田小に関わってくださったみなさまに感謝して～

### 2月14日、校長室にて第10回学校運営委員会が開かれました。

はじめに、土橋校長より「来年度の委員会がスムーズにスタートできるよう、今日は忌憚のない意見を出し合って活動の方向性を固めていきたい」とのお話がありました。

まず、サマースクールについて「今年度はスタッフが集まらず、開催にあたって委員の負担が大きくなってしまった。その反省から、来年度はスタッフをもっと早い時期に募集し、開催の有無や規模を考えたい」との意見が出されました。この提案については、次回の委員会で検討することになりました。

次に、来年度の委員会の活動について話し合われました。校長より、「来年度の目標を『給田小のビジョンをもとに、学校と地域をつなぐ役割を果たそう』とし、その手段としてもっと『通信』を活用し、地域運営学校（以下「CS」と表記）の視点をお互いに学んでいこう」と、これまでの話し合いの確認がありました。

その後、「委員OBであるリエゾン・オフィスの協力を得ながら、通信の記事を書きあげていく過程や完成した通信からCSの視点を学んでいきたい」「委員同士が、もっとコミュニケーションをとることが必要」「それぞれの委員が普段の生活のなかで『CSらしさ』を見つけ、そこから通信の題材を選んでいくといいのではないか」など、さまざまな意見が出されました。

最後に、リエゾン・オフィスから「2年生の生活科の授業で行われた『昔あそび』を掲載した通信特別号を発行する予定です。また、漢検については、保護者のボランティアが減少傾向にあるので、次回からはボランティアを募ったうえで、漢検を実施できるかどうか判断したいと考えています」との報告がありました。

**議題**

1. 学校長より
2. サマースクールについて（提案）
3. 次年度の活動を考える（継続）
4. リエゾン・オフィスより

出席者
多田、芝﨑、程原、田中
渡邊、鈴木、溝口、土橋
片山、鶴岡

リエゾン・オフィス
清水、岡本、若林

### 3月7日、校長室にて第11回学校運営委員会が開かれました。

はじめに、土橋校長の「今日は今年度最後の委員会です。今年度で退任する委員もいますので、ひとりずつ感想を話してもらいましょう」との言葉で委員会が始まりました。

まず、前回の委員会で提案があった「サマースクール実行スタッフ募集」については、保護者会全体会で説明したうえで募集プリントを配布してはどうか、との意見があり、全体会で芝﨑委員から説明することに決まりました。

次に、土橋校長より、来年度の活動について（上記、第10回運営委員会議事録参照）の再確認が行われました。

最後に、各委員が、これまでの活動で感じたこと、考えたことを述べました。

・「通信」の取材などを通して、自分も「地域に住む人間」のひとりだと意識する機会が増えた。（溝口）

・青穂会会長職も任期を終え、これからは「地域ができること」にもっと気づくことができると思う。（田中）

・CSの理解はまだ不十分だが、もう2年頑張りたい。（程原）

・50周年に関わる活動そのものがCS的だと感じた。「もっと学校に関わりたい」と思っている地域の方がたくさんいることを知った。（芝﨑）

また、事務局の先生がたは、教員の立場から、学校と地域が繋がることの価値や今後の展望についての意見を語られました。

リエゾン・オフィスからも、発足して1年目の活動についての感想がありました。

・学校支援コーディネーター・漢検の運営に携わり、楽しく活動できた。来年は、委員会をサポートしつつ、しっかりと活動を続けたい。（若林）

・主任児童委員になり他校の様子もわかるようになった。今後も学校と地域の連携を考えていきたい。（岡本）

・「通信」に掲載された地域の方が喜んでくださったのは、自分の活動が「通信」によって価値づけられたからだと思う。（清水）

（今年度、退任予定の委員の感想は2・3頁に掲載）

最後に、井上委員長より「他校と給田小のCSの違いは、活動をしているだけではなく、その活動をCSの視点で価値づけようしていることにあるのではないか。毎年行っている活動でも、見方を変えることで見えてくるものがある。そうした意味で、やっているだけで満足をするのではなく、質的な面をきちんと評価していくことが重要。それをすべての人に求めることは難しいが委員は意識して取り組んでほしい」との提言があり、委員会が修了しました。

**議題**

1. 学校長より
2. サマースクールについて
3. 次年度の活動を考える（継続）
4. 活動を振り返って

出席者
井上、多田、芝﨑、程原
田中、渡邊、鈴木、溝口
土橋、片山、鶴岡、安部

リエゾン・オフィス
清水、岡本、若林

「教えて！井上先生」。読者のみなさまにも少し懐かしい響きではないでしょうか。ひさびさに通信に登場いただき、地域運営学校について、また学校運営委員会6年目の成果と来年度への課題についてお話いただきます。

# 教えて！井上先生

**まず、学校運営委員会の役割について、簡単にお話いただけますか。**

地域運営学校に置かれる学校運営委員会は、その名前の通り「学校を運営するための組織」ですが、「実際に学校を運営する」と言うよりも、校長の学校経営方針を承認したり、保護者や地域の声を代弁したり、イベントを企画したりしながら、広い意味で「学校運営に参画していく役割を担っている」とご理解ください。

そうした運営や参画を効果的に行うために、私たちは学校や地域で行われている普段の活動をCS（コミュニティ・スクール）の視点で価値付けることを重視してきました。

**「CSの視点で価値づける」ということをわかりやすく教えてください。**

「通信」の第6号でとりあげた「わかたけ活動」を例にお話しましょう。

「わかたけ活動」は35年の歴史を誇る給田小の伝統の教育活動だとされていますが、「何をしているか」を語られることはあっても、「なんのために」については暗黙の了解というか（笑）、だんだんわからなくなっているような気がします。

もちろん、「自主性の涵養」とか「異学年の交流の大切さ」は言われているのですが、地域運営学校や9年教育と結びつけて理解されているとは思えません。

それを、何が何でも結びつけなくてはならないわけではないのですが、学校運営委員会が「通信」で「わかたけ活動」を「人と関わる力の育成」「1番身近な地域活動」という文脈で価値づけたことにより、改めて〈給田小が大切にしているもの〉を読者（そこには、教員、保護者も含まれます）に示すことができたのではないでしょうか。

これまで「明示的に示されていなかった本質的な部分をクローズアップした」とするならば、委員会は「通信」を介して、きわめて重要なかたちで学校運営に参加する、あるいは、教育活動に影響を与える可能性を示した、と考えています。

「通信」が今のようなスタイルになって3年目になりますが、同じような行事を題材にしていても、記事の内容が明らかに違います。それは、運営委員会の活動の質が変わってきたということでもあり、6年目の大きな成果と言えるでしょう。

**今年度、運営委員OBが「リエゾン・オフィス」を立ち上げたそうですが、どんな活動が広がっているのですか。**

学校が地域の人材や教育資源を活用することをお手伝いする「学校支援コーディネーター」という区の制度があるのですが、それをリエゾン・オフィスのメンバーが兼ねていることもあって、給田小らしいやり方で「地域住民の学校教育への参加」が進んでいます。

「Q-denWalker」（5年生の「総合的な学習の時間」）や「昔遊び」（2年生の「生活科」）などがその例なのですが、リエゾン・オフィスは単に学校と地域住民の橋渡しをするだけでなく、「通信・特別号」を発行して「CSという文脈を意識した価値づけ」を試みています。

読者のみなさんが気づいてくださるとうれしいのですが、「通信・特別号」では、「Q-denWalker」という学習の目的や意義を、地域のみなさんや保護者にきちんと伝えるとともに、子どもたちの「地域にはいろんな人がいて、地域のために頑張っていることがわかった」という感想や先生の「地域の方が自分の思いを語ってくださると、子どもも自ずと真剣に聞くようになる」という声をフィードバックすることで、「楽しかったね」だけで終わらないような工夫をしています。地域と関わる活動をすればよいということではなく、「なんのために」を考えながら、広い視野に立って活動することが重要です。

**委員会の今後の活動や課題についてお聞かせください。**

学校や地域には、誰もが何となく意味や価値を感じていて、だからこそ、長く続けられている活動というものがあります。学校運営委員会では、そうした活動の意味を考え、新しい光を当てながら、給田小らしい学校づくりを考えていきたいと思っています。

読者のみなさまには、ボランティアへの参加はもちろん大歓迎ですが、いろんな事情で参加できなくても、ぜひ関心をもって見守っていただければ幸いです。

# 今年度、退任する委員

**H21年度～　土屋 俊幸**

地域運営学校の運営は今の日本が抱えている問題と重なるように思う。子どもたちが人との結びつきの大切さを持ちながら成長する。又、その活動に携わった大人たちには、やりがいを通じての達成感と幸福感が生まれる。映画「ALWAYS三丁目の夕日」を見て感じる世界である。給田小地域運営学校が目指すひとつの方向だと思う。

今と昭和30年代の違いは、当時は高度経済成長中であり貧しくもみんなが同じ方向を向いていた。今は成熟社会となり人それぞれの価値観が違っている。地域運営学校を継続していくためには、学校向きに一方通行的な結集力を求めるのではなく、学校から双方向の性格を持つ広がり力・つながり力をはぐくむ活動が必要と感じている。今後は学校の外側からつながる活動を進めていきます。

**H22年度～　多田 尚美**

子どもが給田小を卒業してから2年間、地域の一人として活動してまいりました。

「地域のなかにある小学校」「地域で育つ子どもたち」を意識すると、自分の子どもが進学し自身の環境が変わっても、それは開けた扉を後ろ手に閉めて次の間に進むのではなく、繋がった部屋を先に進むだけだと気づきます。活動のなかで子どもたちにもらった笑顔やパワーは地域のうるさいおばちゃんとして返していけるでしょう。お世話になったみなさまへもご恩返しの機会はきっとあると信じています。知り合えた保護者のみなさんとは数年後も数十年後も「あのときぁ」と語り合えたら素敵です。

給田小で結ばれた絆が世代を超えて広がっていると実感しています。

# 6年生ありがとう！

「人は節目が多いほど成長する」と校長先生。卒業という節目でのさまざまな取り組み（鼓笛移杖式、6年生を送る会、お別れ球技大会など）では、大きく成長した6年生の姿がありました。

ここでは、給田小伝統の「鼓笛移杖式」の様子を紹介します。

## 鼓笛移杖式

「♪ソーソーソソソソラーソー♪」『こんにちはトランペット』の行進曲を聞くと、運動会などさまざまな思い出がよみがえる方も、たくさんいらっしゃることでしょう。

給田小の「鼓笛隊」は、開校と同時に誕生し、もともとは選抜された児童で構成されていました。卒業生の中には、何度もオーディションを受けた記憶のある方もいるのではないでしょうか。特に指揮者は女子に人気があり、憧れの的だったそうです。

現在の鼓笛隊は、クラスごとに編成されていて、6年生全員が参加しています。

指揮・6ー2瀬戸 翔一君から
5ー2大西 希さんへ

卒業式まで残り1カ月となった2月25日。鼓笛隊の引き継ぎセレモニーである「鼓笛移杖式」が寒空の校庭で行われました。

小・中・大太鼓、シンバル、ベルリラ、マーチング・キーボード、トランペット、そして指揮者。5年生は12月のうちに自分が演奏したい楽器を考え、3学期最初に担当が決まります。5年1組は6年1組という「縦割りクラスの上級生」から3度にわたり教えてもらい、その後、個人やクラス全員での練習を重ねてこの日を迎えます。練習の時には、演奏のコツを書いた手紙や模造紙に寄せ書きしたメッセージなど、クラスごとに趣向をこらした温かい励ましが6年生から5年生へと贈られたそうです。

移杖式当日は、6年生の貫録たっぷりの演奏で始まりました。最後の演奏ということで、ひときわ凛々しいその姿に下級生たちの尊敬の眼が集まります。

その後、6年生の指揮者から5年生の指揮者へ「杖（つえ）」の形に似た指揮棒がうやうやしく手渡され、「鼓笛隊」が5年生に任されました。6年生の指揮者から「鼓笛の引継ぎを経験して、教えることの難しさを知りました。それと同時に自分たちが1年間でどれだけ成長したのかがよく分かりました。また、伝統が実際にどのように引き継がれるのかということも分かりました。5年生のみなさんにはこの伝統をしっかりと引き継いでいって欲しいです」とあいさつがあり、それを受けて5年生の指揮者が「最高学年の誇りを持って1年間やっていきたいと思います」と意気込みを語りました。

# 鼓笛・受け継がれる伝統

6年生最後の演奏（6年2組）

式を締めくくるのは5年生の初めての演奏です。緊張しながらも、一生懸命に最後まで演奏する姿からは、「杖」だけでなく「責任」も、受け継がれていく様子が伝わってきました。

学校運営委員のOBで鼓笛隊（選抜時代）だった田中龍次さんは、鼓笛隊について「私たちの頃の給田小は『健康教育』よりも『音楽教育』に力を入れていたように記憶しています。今も運動会などで鼓笛の演奏を聴くと、当時の様子が鮮明に思い出されます。音楽の記憶はより深く心に残るのでしょうか。こうして脈々と受け継がれている『給田小の鼓笛隊』は卒業生の誇りです。私からも6年生に『ありがとう』と申し上げたい」と思いを話してくださいました。

# 今年度、退任する委員

H23年度～　渡邊 理恵

私が子どもの頃、父親の度重なる転勤で私自身も転校になり、たくさんの人との出会いと別れを繰り返しました。社会人になり更にたくさんの人たちと関わり、人にはそれぞれの違った見方や考え方があって、十人十色、百人いたら百色の価値観から、大なり小なり影響を受けながら、自分らしさや自分の生き方を考えるチャンスを与えてもらえたと思います。

子どもの時から、学校や地域の中で頑張っている人たちと直にふれあい、その時の匂いや音、景色もひっくるめて、いい刺激をいっぱい受けながら、人と関わることの喜びや楽しさを子どもたちには味わって欲しいです。そして今度は私が恩返しの気持ちで、この地域で頑張る大人になりたいと思います。

H23年度～　鈴木 あゆみ

さまざまな人との関わりの中で、子どもたちを強くしなやかに育てようとして下さっている先生がた。子どもたちに愛情をたっぷり注いで下さる地域の方がた。多様な活動で子どもたちの育ちをサポートして下さる保護者のみなさん。本当にたくさんの方が給田小の子どもたちを大切に思い、豊かに育んで下さっていることに感謝した2年間でした。

子どもにまつわる社会問題の要因として、子どもが人と関わる機会が減ってきていることが挙げられているのをよく目にします。家庭だけでは育てられない子どもの生きる力を「みんなで育てていく」ことの大切さを今あらためて感じています。「みんなの子ども」のために自分にできることは何なのかを、これからも考え続けていきたいと思います。

# 給田小・朝の風景

**北烏山駐在所の程原さん**：平成13年に起こった池田小事件の翌日から、毎朝欠かさず子どもたちを見守って12年！
**新部和子さん**：平成15年に入学したお孫さんの登校を見送りに来ていたのが始まりで、お孫さんが卒業した現在も子どもたちを見守ってくださっている優しい「みんなのおばあちゃん」
**池亀安衛さん**：正門に立ってくださるようになってもう5年。「一人ひとりの顔を見て、心のこもったあいさつをするように心がけています」

「おはようございます！」「おはよう！ 今日はいつもより早いね」 給田小の子どもたちの1日は、正門の前での、気持ちのいいあいさつで始まります。

程原さんに「これ見て！」と通学路で見つけた宝物を嬉しそうに見せる子。池亀さんと毎日、握手してから校舎に向かう子。新部さんの愛犬マロンと遊ぶのを楽しみにしている子。子どもたちにはそれぞれの「朝の風景」がありますが、そこにはきっと「3人の地域の方」がいることでしょう。

ちょっとお話してから
「行ってきます！」

「家にいるだけだと、主人に一度『おはよう』と言うだけでしょ。ここに来ると、何百回も子どもたちとあいさつを交わすことが出来て元気をもらっているんですよ。自分からあいさつしてくれる子も増えたように思います。私は給田に越してきて知り合いがいなかったので、ここで繋がるお付き合いがとても楽しいです」と新部さん。

池亀さんは「あいさつの力は大きいですね。近所の人たちもあいさつしてくれるようになりました。地域に知った顔が増えることで、自分自身も安心できますし、楽しくなりますね」と、地域の見守り活動のパイオニアらしいお話をしてくださいました。

程原さんも「子どもたちのために自分ができることは何か、と考えて始めたのですが、やってみると楽しいですよ。警察官としても、みなさんには『良い町に住んでいる』と思ってもらいたいと常に考えています。定年まで続けようと思っていたのですが、お2人の話を聞いていたら、定年では終われませんね」と思いを語ってくださいました。

取材をしていると、程原さんをはじめみなさんが子どもたちだけでなく、通勤で駅に向かう地域の方ともあいさつしている光景が何度も見られました。

「そろそろ赤ちゃん来るよ」と子どもたちが待っていると、ベビーカーで赤ちゃんを連れた若いご夫婦がやってきました。子どもたちがマロンを抱いて赤ちゃんの周りを囲みます。「最初はこの子が何となく犬を気にしてじっと見ていただけだったんですが、毎日通るうちに、いつの間にか私たちも自然とあいさつを交わすようになりました。公園でも、給田小のお子さんたちがよく遊んでくれるんですよ」と給田に住んで3年目になるというご夫婦は嬉しそうに話してくださいました。

バイバイ
また明日(´▽`)ノ

また、ある日の取材ではこんなことがありました。校門前の道路に落し物の袋があり、程原さんが中を見てみると、赤ちゃんのものが二つずつ入っていました。池亀さんと程原さんが、同時に「あの人だ！」と、毎朝、双子の赤ちゃんをベビーカーに乗せて通るお母さんの落し物ではないかと気がつきました。程原さんがバイクで保育園に向かう道を追いかけて行き、そして、そのお母さんに会い、無事に落し物を届けることができたそうです。今まであいさつを交わしたことはなかったそうで、お母さんはとても驚かれたそうです。双子の赤ちゃんが「あいさつの輪」にデビューする日も近いのではないでしょうか。朝の給田小の校門前に新しいコミュニティができつつあることを感じました。

## 今年一年を振り返って

「校長先生、TVに出演していたね」と、子どもたちや保護者から時々、声をかけられます。一昨年10月に放送大学の番組の収録が行われ、今年度の春と夏に「給田小の地域運営学校の活動」が放映されました（5年間は放送され続けるようなので、見逃した方もいつか見ていただけるかもしれませんね）。

5月には文部科学副大臣が給田小を視察にみえ、意見交換をする機会にも恵まれました。

そうしたことは、私たちの取り組みが一定の評価を得て、注目されている証拠だと誇らしく思います。

給田小が地域運営学校に指定されて6年が経過しました。敢えて特別な組織をつくらずに、CSとしてのビジョンを大事に、一歩一歩、大地を踏みしめながら進むように活動してきました。特に、学校や地域で行われている教育活動の意味を考え、それを「学校運営委員会通信」として発行し続けてきたことは、少しずつではありますが、学校の内外に確実に変化をもたらしていると感じます。それは、これまで学校の中だけで終わっていた教育活動が外に向かって開かれていくようになったことです。また、CSのビジョンを意識して活動することによって、これまでと同じ内容であったとしても、子ども、教師、保護者にとって、より価値の高い活動になっていく可能性が見いだされることです。

保護者や地域のみなさんの学校へのまなざしは、年々温かさを増しており、学校・家庭・地域が一体となって、子どもを育てていると実感しています。

来年度から、世田谷区のすべての小中学校が地域運営学校となります。世田谷9年教育も本格的に実施されます。給田小はそれらのモデルになるに違いありません。力を合わせて「みんなの子どもをみんなで育てていきましょう」。

校長　土橋 稔